

〈研究ノート〉

近世尾張地域の軒平・軒棧瓦に関する情報整理—文様編年について—

濱崎 健

キーワード

東海式 軒平瓦 軒棧瓦 文様 名古屋城三の丸遺跡 尾張藩麴町邸跡 尾張藩徳川家上屋敷跡遺跡 犬山城 富部神社

はじめに

東海地方では古くから窯業が盛んであり、現在でも陶磁器などの日常什器のほか三州瓦やタイルなど生産品を変えながらも存続している。名古屋城で発掘調査を実施すると出土遺物の多くが瓦であり、東海地方で生産された瓦である。東海地方で生産された瓦は地元のみでの使用にとどまらず、江戸にも運び込まれ利用されていた。そのため江戸城下町遺跡の発掘調査でも東海地方で生産された瓦が出土している。特に尾張藩の屋敷である市谷邸や尾張藩麴町邸跡の発掘調査では、江戸で生産された瓦と東海地方で生産された瓦が両方出土していることから、尾張藩が屋敷で使用する瓦を江戸と国元の尾張で揃えていたことがわかっている。

東海地方の瓦の特徴として、胎土に砂粒を含んでおり色調は白色ないし灰白色を呈している。また特に軒平瓦と軒棧瓦の成形技法の特徴として、瓦当部分に強いナデ調整が入ることが挙げられる。さらに文様の中心飾りに、樹枝および点珠からなる花紋を持つことが挙げられる。これは江戸や大坂の瓦文様とは異なる東海地方特有のものであり、詳細は後述するが、金子智氏の成果（金子 1994 および金子 2003）により江戸城下町遺跡の調査では「東海式」と呼ばれる一群で分類され、認知されている。しかし名古屋城内の発掘調査や名古屋城三の丸遺跡の発掘調査により「東海式」の分類基準と異なる文様がいくつか確認されている。それらは梶原氏によりまとまった文様として系列が示されており（梶原 2017）、山崎信二氏によりある程

度瓦の年代が示されている（山崎 2008）。しかし梶原氏と山崎氏の成果は 16 世紀後半頃や 17 世紀代に比定される、近世初めの時期に焦点が当てられており、金子氏の成果への変遷がうまく提示できていない。そのため「東海式」と分類できる文様の成立時期など、定かでない部分が存在する。そこで今回名古屋城の時期にあたる軒平・軒棧瓦の文様について、一部資料を追加しつつ、編年の試案を提示したい。

なお本稿では、近世尾張地域で確認できる瓦を対象とし、金子氏の提示した分類基準（金子 2003）に該当する文様については「東海式」と呼称する。それ以外の文様は梶原氏が（梶原 2017）で提示した文様名称を用いる。すなわち中心飾りがある一定の位置から三方向ないし五方向に半円状に展開する様相を見せる文様を三子葉・五子葉文系。中心飾りがある一点から三方向に半円状に展開し、瓦当上面に近づくとさらに三方向に枝分かれ状に展開する様相を見せる文様を先端三叉状三子葉文系。中心飾りがある位置から三方向ないし二方向に曲線の軌跡を描きながら展開し、瓦当上面に近づくと先が細く鋭くなる様相を見せる先端剣菱状三子葉文系。3 単位以上の複数の唐草を持ち、中心飾りが単線あるいは一点から半円状に広がる様相を見せる三子葉萼文系。くびれを持った唐草を 4 単位程度持ち、中央飾りに唐草を組み合わせ風車状に回転させたあるいは花冠を放射状に展開した文様を風車状五子葉文系と呼称する。

1 研究史の整理

(1) 名古屋城三の丸遺跡における試み

「東海式」の瓦は様々な遺跡で出土しており、編年に必要な資料が増えつつある。名古屋城三の丸遺跡第 4・5 次の調査（服部ほか 1994b）では 2740 個体もの瓦が出土しており、大別し

て燻瓦と鉄釉陶器瓦⁽²⁾の2種類が確認されている。これらは名古屋城三の丸遺跡内に存在したとされる御霊屋に葺かれた瓦とされている。服部哲也氏は出土したこれらの軒棧瓦の文様を13形式に分類し、鉄釉陶器瓦は4形式の5種、燻瓦は13形式33種に細分した。そして中心飾りの変遷傾向と唐草部分にくびれを持つ文様が延享年間(1744～1748)に出現し天明年間(1781～1789)に流行する可能性を指摘した。

(2) 尾張藩麴町邸における瓦様相について

江戸城下町遺跡で出土した東海地方の瓦については、金子智氏による文様分類が試みられている。金子氏は東京都千代田区尾張藩麴町邸跡の発掘調査で出土した軒平瓦・軒棧瓦の文様を「江戸式」・「大坂式」・「東海式」とそれ以外の文様に4種類に分類し、江戸遺跡に運び込まれた瓦の文様の傾向を検討したうえで、同遺跡における瓦の変遷(図1)を示した(金子ほか1994)。その後東京駅八重洲北口遺跡の発掘調査(金子ほか2003)にて、東海地方で生産されたと思われる瓦が、図2で提示した種類確認された。また文様分類基準が改めて提示され(図3)、現在でも江戸遺跡における近世瓦の分類指標として利用されている。この中で「東海式」の瓦は、図3でC種と示した一群、すなわち「尾張・三河・伊勢などの瓦産地で、主要な文様として樹枝および珠文から成る中心飾りを特徴とする均整唐草紋をもち、中心飾りと唐草上下2反転で構成され、胎土は明灰色あるいは、白色に近い灰白色を呈する一群」と定義づけられた。

(3) 山崎氏による編年の策定

瓦の編年は山崎信二氏による試みがされており、各県・地方における瓦の資料を取り上げながら各地の瓦の様相を示した(山崎2008)。その中で愛知県の瓦については、清洲城及び名古屋城から出土した瓦をそれぞれの関連遺跡と比較しながら、近世Ⅱ期(1582～1591)から近

世Ⅷ期(1765～1800)の変遷を記載した。その内名古屋城の瓦は近世Ⅳ期(1615～1657)から近世Ⅷ期(1765～1800)に該当するものとして設定した(図4)。

(4) 梶原氏の整理

梶原義実氏は愛知県の瓦生産とその流通についてまとめた(梶原2017)。尾張地域の織豊期から近世前半の瓦について、清洲城下町遺跡の瓦にコビキAのみが認められる期間(1576～1582)と、コビキAとコビキBが確認される期間、コビキBのみが確認される「清洲越」を下限とする期間(～1610-15)があることを示した。また犬山城の瓦に、清洲城と同範・同文関係の瓦と、名古屋城三の丸遺跡と同範・同文関係が確認できる瓦があることを示し、山崎氏の編年に資料を追加し、文様の変遷を示した(図5)。さらにこの際、名古屋城三の丸遺跡の瓦文様について、先端三叉状三子葉系、三子葉・五子葉文系、三子葉萼文系、風車状五子葉系、東海式の5種を示した。

2 文様の分析

(1) 分析方法

ここまで服部氏、金子氏、山崎氏、梶原氏の成果を紹介した。

服部氏により、同時に出土した紀年銘資料とともに、軒平・軒棧瓦文様の年代が言及された。金子氏により、江戸遺跡で出土する瓦の傾向を分析する上で有効な基準が示された。山崎氏により、近世期における愛知県の瓦変遷が総括されるに至った。梶原氏により、山崎氏の成果の追記と金子氏の提示した「東海式」を除いた文様体系の整理が行われた。そのためこれらの成果を総括すると、概ね資料や成果が揃いつつある状況にある。

本章では山崎氏の編年における近世Ⅳ期から近世Ⅷ期、名古屋城の時期とされる1600年か

ら1860年程度の時期に比定される瓦を対象として、瓦の年代観から時期ごとの文様の変遷を分析していきたい。

(2) 「東海式」成立以前の文様変遷について

まずは17世紀の様相について述べる。17世紀は山崎氏の近世Ⅳ期・近世Ⅴ期・近世Ⅵ期の一部が該当している。17世紀の初頭は「清洲越」の時期であるため、基本的な文様体系は清洲城の延長に位置する。ただし清洲城の瓦がそのまま名古屋城へ伝わったわけではなく、梶原氏が述べているように、清洲城から犬山城への技術者移動を経てから名古屋城への技術者移動が開始されるため、清洲城で多く確認された三角文系・桐文系の文様が犬山城と名古屋城の双方で確認されていない、先端三叉状三子葉系と先端剣菱三子葉系の変化などの変遷が確認できる(梶原2017)。そのため山崎氏の提示した近世Ⅳ期に設定した瓦の内、名古屋城で用いられた瓦文様は、三子葉・五子葉文系(図6①)、先端剣菱状三子葉文系(図6③)、先端三叉状三子葉文系(図6④)の3系統が存在していたと考えられる。このうち三子葉・五子葉文系は愛知県あま市甚目寺三重塔の例から17世紀第1四半期頃の文様(図6⑤)が確認できる。他に先端剣菱状三子葉文系と思われる文様を持った緑釉瓦(図6⑦)が愛知県瀬戸市穴田窯にて確認されている。ここで確認された瓦は燻瓦ではないが、少なくとも17世紀中葉頃まで先端剣菱状三子葉文系を用いた瓦の生産が行われたと推測される。他文様については途中の変遷が不明な状況ながら、17世紀中葉頃まで継続して生産されたとも推測する。

17世紀中葉以降の年代について、山崎氏は近世Ⅴ期として1657年から1682年の年代を設定し、名古屋城三の丸遺跡で出土した瓦をその年代の資料とした(山崎2008)。梶原氏はその年代に設定された文様を三子葉萼文系として系

列化し、その変遷を提示した(梶原2017)。山崎氏によるとこの文様は駿府城の瓦を祖型に持ちそこに大坂式の様相が入っていったとしている。そして時期が新しくなるにつれて、中心三子葉文の中央部分が単線から徐々に分離したものになり、唐草紋が複雑に組み合わさって反転回数が多くなる特徴を持つとした(山崎2008)。三子葉萼文系はその後登場する風車状五子葉文系(図6⑪)と「東海式」(図6⑫)の祖型となり、三子葉萼文系の簡略化が進行した結果、この2種の文様が成立すると思われる。ただしこの文様の出現時期については、検討が必要であると思われる。というのも駿府城の時期について記すと、慶長12年(1607)に公儀普請が開始され、その後火災で焼失し寛永15年(1638)に再建が行われたとされている。そのため三子葉萼文系が出現し始める上限年代が古くなる可能性がある。同様の可能性を指摘する例として、慶長11年(1606)に建設されたとされる名古屋市南区に位置する富部神社では、名古屋城三の丸遺跡で出土した図6①と同じ文様の瓦に加え、三子葉萼文系文様に似た唐草文様が複数組み合わさり反転回数が多い瓦(図6②)が確認されている。富部神社では屋根修理が複数回記録されており、鬼瓦の取り換えなどが実施されている。そのため後世に瓦の入れ替えが行われた可能性は否定できない。しかし記録上最初の屋根修理が実施されたのは貞享4年(1687)で、三子葉萼文系が出現し始めたと言われる山崎氏の編年における近世Ⅴ期の年代観からは外れてしまう。また仮にこの瓦がその時期の三子葉萼文系の文様であると仮定しても、時期が新しくなるにつれて簡易的な表現になっている文様が、この瓦のみ写実的な変化を起こしていることになり、型式学的な変化としては考えにくい。この瓦は清洲城下町遺跡や犬山城では確認されていないため、富部神社の建設時期に現れた文様

である可能性が高い。この二つの事例から、三子葉蓼文系の出現時期は山崎氏の編年より古くなるものと思われる。三子葉蓼文系の年代変遷を厳格に提示できる資料はなく、推測が多い状況だが、三子葉蓼文系の用いられた時期を17世紀初めから17世紀後葉頃と仮定すると、文様変遷として、富部神社で確認された文様(図6②)が富部神社の建設時期にあたる17世紀初頭頃、名古屋城三の丸遺跡と駿府城で確認された文様(図6⑥)を駿府城の再建時期に合わせて17世紀第1四半期頃、名古屋城三の丸遺跡と甚目寺で確認された文様(図6⑧)が17世紀中葉頃、名古屋城三の丸遺跡Ⅶ(鈴木ほか2005)で確認された文様(図6⑨)を経て、名古屋城三の丸遺跡Ⅳ(川井ほか1993)および名古屋城三の丸遺跡第4次・5次(服部ほか1994b)で確認された文様(図6⑩)が17世紀第3四半期頃にあたり変遷していくものと推測する。

17世紀末から18世紀初めにかけての様相は梶原氏が風車状五子葉文系とした文様(図6⑪)と、「東海式」に分類可能な三子葉文と列天文を組み合わせた文様(図6⑫)が存在する。

前者は犬山城にてH151型式と分類されたもの(図5に掲載)や、尾張藩上屋敷跡遺跡、名古屋城三の丸遺跡などで確認されており、後の「東海式」瓦の2反転唐草で用いられるくびれを持った唐草が用いられている。また中央飾り部分は風車だけでなく、尾張藩麴町邸跡で見られるような五弁花状のもの(図6⑪内の左側)になる場合があるなど他の文様パターンも存在している。これらの文様は尾張藩麴町邸跡の調査にて提示された年代観からも18世紀以前とされているため、風車状五子葉文系が出現する年代と同時期にあたりと想定される。そのため風車状五子葉文系として系列化したうえで、出現時期としては三子葉蓼文系より後の時期17

世紀後葉以降18世紀初頭程度の年代を推定するのが適切であると思われる。

後者については犬山城でH151型式と同時期の群として分類されたH321型式・H322型式・H323型式(図6⑫内左からH321型式・H322型式・H323型式)が挙げられる。犬山城内で確認されたH151型式・H321型式・H322型式・H323型式の瓦にはハナレ砂がわずかにみられる特徴を有している。これ以降の時代にはハナレ砂がみられなくなることから、生産技法が変化しているといえる。そのためH321型式・H322型式・H323型式の3つの瓦はH151型式すなわち風車状五子葉文系と同時期の瓦であると推測される。このH321型式・H322型式・H323型式の瓦は「東海式」として分類できる瓦としては現状最も古く、「東海式」文様の成立時期に近い文様と考えられる。H321型式と同文の瓦は名古屋城三の丸遺跡(川井ほか1993)におけるSK210号遺構で出土している。ただしこの遺構の廃絶時期は19世紀中葉頃であり、犬山城の資料も表採遺物であるため、出土資料として年代を提示できていない状況である。全体的に17世紀から18世紀にかけての年代を確実に提示できる瓦は資料量が乏しく、「東海式」の成立時期について具体的な年代を示すことはできていない。山崎氏は近世Ⅵ期を1682年から1724年までとして設定した。しかし犬山城で見られる瓦にはハナレ砂がわずかにみられるが、後述する1723年に建立されたとされる光明寺鐘楼門の瓦はハナレ砂がみられない瓦であるため、生産技法の変化が近世Ⅵ期内で発生している。文様も「東海式」として認識できる文様となっていることから、同時期区分の資料として取り扱わずに、17世紀の後葉から18世紀初頭程度の年代までの時期とそれ以降の時期で分けた時期区分を行うのが適切ではないだろうか。

そこで1600年から1700年までの時期の文様変遷を図6で提示する。

(3) 「東海式」成立以降の文様変遷について

18世紀は「東海式」が本格的に供給される時期となる。

18世紀第1四半期頃にあたる資料としては、名古屋城三の丸遺跡第4・5次（服部ほか1994b）で出土した資料（図7①）と愛知県あま市光明寺鐘樓門の軒平瓦（6）（図7②）が挙げられる。山崎氏は尾張徳川家上屋敷Ⅶ（伊藤ほか2001）の資料（図7③）を1710年代、光明寺鐘樓門の資料（図7②）を1730年代と位置付けている（山崎2008）。これらの資料にはハナレ砂が用いられていないことから、前述した犬山城の瓦（図6⑫）よりも新しいものと思われる。また光明寺鐘樓門の軒平瓦は同文様の軒棧瓦が尾張藩麴町邸跡や尾張藩徳川家上屋敷跡遺跡などで出土している（図7④）。そのため、延宝2年（1674）に近江の瓦師西村半兵衛が開発した棧瓦は、延享2年（1745）に町屋での使用が名古屋城下で許可されるようになるので、少なくともその時期まで同様の文様が続いたことが想定される。尾張地域ではこの延享2年（1745）を境にして、瓦の需要が増大することが想定される。軒平瓦の文様と同文様の軒棧瓦が出土しているのは、同じ文様を継続して用いることで需要増に対応した結果、生じた状況であると思われる。図7①や図7②の唐草文様を比較すると、風車状五子葉文系の影響を受けたと思われる3つの唐草を用いている文様と、二対の唐草を用いている文様がみられる、といったように唐草文様の配置は一定でない。中心飾りについては金子氏が（金子2004）で示した分類基準（図3）に従うと、図7①の瓦は一つの樹枝に三つの天珠のみを用いたⅢ類の中心飾りを持ち、図7②の瓦は三つの樹枝に天珠がそれぞれ付属した $I_1 \cdot I_2$ 類のような中心飾りが

みられることになる。これらの中心飾りはいずれも樹枝と天珠を用いる文様で、この時期以降の尾張地域で生産された軒平・軒棧瓦の主文様となる。

18世紀中葉以降から18世紀第3四半期頃の資料は最も数量が多く、名古屋城三の丸遺跡にて服部氏が延享年間（1744～1748）の瓦（図7⑤）・天明年間（1781～1789）の瓦（図7⑧）と位置づけた成果（服部ほか1994b）、それらの上に位置する尾張藩麴町邸跡の成果（金子ほか1994）（図7⑥）、光明寺の瓦（図7⑦）が当てはまる。服部氏の成果は、尾張藩麴町邸跡（金子ほか1994）や尾張徳川家上屋敷遺跡（伊藤ほか2001）の調査で出土した瓦と比較しても、それぞれの遺跡の同時期に同文様の瓦が確認できることから、正確性の高い成果と言える。尾張藩麴町邸の瓦については、図1の第3段階に位置付けられた瓦が名古屋城三の丸遺跡にて延享年間と位置づけられた時期の瓦（図7⑤）と様相と合致している。また図1の第5段階の瓦は名古屋城三の丸遺跡にて天明年間とされた瓦（図7⑧）と同様の様相を示している。そのため山崎氏は図1の第4段階の瓦に対して細分を行い、くびれの持たない瓦を1750年代、くびれの持つ瓦を1760～1770年代と位置付けた。また光明寺の瓦についても、図7⑦の瓦を1760～1770年代とし、図7⑨の資料を1790年代とした（山崎2008）。このように18世紀の中葉以降の瓦は文様の画一化がさらに進み、文様構成は中心飾りと唐草が上下する文様に移る傾向を示す。そのため金子氏の文様分類（図8）におけるC種のバリエーションの項目で示された文様配列が多くなる。また服部氏が示したように、天明年間以降瓦の唐草にくびれを持つ文様が増加する（服部ほか1994b）。

19世紀にはいると、文様以外の変化としては、19世紀以降から産地や生産者の情報が記

された角印が押される瓦が出現するようになる。⁽⁷⁾技術的にも棧瓦に瓦の反りに対して平行に複数の条線が施されたものが出現するなど変化がみられるようになる。文様としては中心飾りが大型化し、文様の構成部位がそれぞれ分離し接続しなくなる、あるいは逆に接続するようになるものが多くなる。また軒丸部の周縁が広がり、巴文が縮小して尾が短くなる傾向を示すようになる。資料としては尾張藩徳川家上屋敷跡Ⅶの資料が挙げられ(図7⑫)、丸瓦部文様である巴文が縮小している様相が確認できる。この資料は出土状況としても近代初頭の遺物と相伴していることから、19世紀代以降近代初頭までの年代にあたる資料である可能性が高い。光明寺の資料は先述した図7⑨の段階で、第2唐草の反転が急激に立ち上がるようになり、くびれが天明年間のものよりも多く、唐草と中心飾りの間隔が短くなる様相が確認されている。山崎氏は1800年以降1850年までの資料としても光明寺の瓦(図7⑩)を取り上げている(山崎2008)。金子氏の主張に従うと、この瓦には角印がおされていることから19世紀以降の瓦と思われる。文様の特徴として、前述した唐草が中心飾りと繋がり単線で結ばれるようになる様相が確認できる。逆に文様を構成している部位が分離していくものとしては尾張元興寺跡8次調査の資料(図7⑪)が挙げられ、唐草のくびれ部分が分離しかかっており、わずかに単線でつながっている様相が確認できる。

19世紀第3四半期頃にあたる資料には尾張藩麴町邸跡の瓦(図7⑬)と尾張藩吉田屋敷跡の瓦(図7⑭)が該当する。尾張藩麴町邸では近代時期に比定される遺構が一部確認されており、そこで確認された図7⑬の資料は19世紀中葉以降から近代の時期に該当する瓦と思われる。唐草の線が短くなり、中心飾りもそれぞれの樹枝部分が大きく離れる様相のものと、光明

寺の瓦(図7⑩)に近い中心飾りと単線で結ばれる程接近しながら、くびれ部分が少なく分離が進んでいる様相の瓦が確認できる。尾張藩吉田屋敷跡は文久3年(1863)に立てられたとされている屋敷で、そこで確認された瓦は唐草が完全に分離し、くびれが矮小化する様相が確認されている。

この二つの瓦の存在から近代以降も「東海式」の文様が継続していくと思われるが、それ以外にも、文様区画だけ残されつつ文様自体は無文である瓦や、万十と呼ばれる文様区画すら残らない完全な無文の瓦が出現するようになる。それらの出現時期については不明であるが、近代以降の出現と考えられる。そのためこの二種類の瓦は今回取り上げないものとする。

以上を踏まえ18世紀から19世紀第3四半期までの成果をまとめると、図7のように提示できる。情報の偏りがあることは否めないが、現在までの成果を踏襲しつつまとめたものであり、今後も資料の増加などがなされ次第拡充を試みていきたい。

3 おわりに

最後に尾張地域の瓦の研究課題点をいくつか言及しておく。まずは東京駅八重洲北口遺跡で金子氏が示した52種類の文様(図2)の大部分の時期が不明であるという点。編年可能な資料が少ないこともその一因であるが、近世瓦自体の変化が少なく瓦自体が長い耐用年数を持っているために、古い建物などでも新しい時期の瓦と古い時期の瓦が混ざりあう状況が確認される。また廃棄されるタイミングも建物が壊されるなどの一括廃棄が多く、陶磁器のように年代判別として用いるのは不正確な資料である。

次に「東海式」文様について具体的な成立年代・成立契機が不明である。これまでのまとめから「東海式」文様が成立したのは17世紀後

葉から18世紀初期にかけての時期であると思われる。しかしその過渡期と思われる犬山城の瓦は、表採遺物のため、それ以上の詳細な年代は未だ提示できていない。「東海式」文様の成立契機は瓦需要の増加があると思われるが、尾張国・伊勢国・三河国と生産地が3国に跨っていることから、それぞれの地域ごとに文様が独自化していても不思議ではない。しかし実際にはそれぞれの地域で「東海式」文様となるような、統一規格を作成して瓦を生産している。また「東海式」文様を統一規格として考えた場合、東海で生産された瓦の中に「大坂式」と同様の文様がみられるなど、「大坂式」文様が東海地方で生産される事象が発生している。なぜそのような傾向がみられるのかも考える必要がある。

最後に東海の近世瓦に対しては明瞭な生産地が発掘調査にて確認されていないため、文献の成果を実証することができていない問題もある。そのため陶磁器類と異なり、瓦は胎土による産地特定が困難である。また全体的に近世瓦を対象にした分析はあまり実施されておらず、製作技法や文様などから「東海式」のようなまとまりで提示されているのが現状である。文献上の生産地は5つの地域に絞られているものの、具体的な場所の特定や胎土との結び付けには至っていない。特に伊勢地域の瓦について考える場合、桑名城下町、松坂城下町などの伊勢国周辺との関係性についても検討が必要である。その上流通範囲は東海地方周辺に留まらず、江戸遺跡に運ばれるほど広域で使用されているので、より広域の交流を検討することも必要だろう。

今回は名古屋城の時期における軒平・軒棧瓦の文様変遷をまとめることを目的としたが、まだ課題点が多く存在しており途上段階にある。名古屋城の発掘調査では、出土遺物の多くが瓦

であるため、今後も資料の増加が見込まれる。当面はその成果を積みかさねることで、名古屋城の出土傾向を整理してまとめていき、他遺跡との比較検討が積み重ねられることが必要であるとする。最後に末筆になるが今回は文様の変遷を論の一つとすることを目的としたため、用意した図版は全て縮尺任意となっている。ご容赦いただきたい。

註

- (1) 瓦の生産地については岡村弘子氏が名古屋城下、尾張南部（知多）、三河西部、伊勢、美濃の5地点で生産された瓦が名古屋城下に供給されたと主張した（岡村2004）。
- (2) 鉄釉陶器瓦は赤瓦とも呼ばれる。名古屋城三の丸遺跡にて確認された鉄釉陶器瓦は、成形技法が燻瓦と同様であるが、陶器に用いる胎土が用いられており燻瓦より緻密で黄白色な色調を示し、その上に鉄釉を施して瓦の色彩を表現した瓦である。燻瓦は後天的に黒い色調を燻す、あるいは還元炎による高温焼成の結果生じるもので鉄釉陶器瓦とは色調が異なる。鉄釉が施された瓦は山形城・盛岡城・若松城などで確認されているが、特徴として施釉されている釉薬が赤褐色を呈しており、全面施釉されている点が挙げられる。それに対して名古屋城三の丸遺跡で確認された鉄釉瓦は全面施釉でない、釉薬は黒色を呈している点が異なる。名古屋城三の丸遺跡では赤褐色を呈する鉄釉陶器瓦も確認されているが、さび釉と言われる茶褐色を呈したもので、これも全面施釉でないなど差異がみられる。これらの違いから名古屋城三の丸遺跡の瓦は山形城・盛岡城・若松城などで確認された瓦と生産技術が異なると考えられる。ただしこれらの瓦と、近代になって生産される瀬戸の赤津瓦との技術的な関連性については不明である。
- (3) コビキとは瓦の大きさに応じて粘土板を切り取ることを指す。森田克行氏はコビキに使用する道具の違いから、緩弧線が糸切状に生じるコビキAと、横筋になって生じるコビキBの二種類を提示した（森田1984）。詳細な

年代の言及は避けるが、近世の瓦は調整によりコビキ痕が消されているか、コビキ B が多い傾向にある。

- (4) 甚目寺三重塔は柱盤彫銘に「寛永四年卯季林鐘五日」、鬼瓦のヘラ書きに「寛永四丁卯年六月吉日」「村田」の記載があることから、寛永4年(1627)に創立されたことがわかる。山崎氏はこの塔の解体修理時に降ろされた軒平瓦は中央に三葉文を配し、顎部から平瓦部へ移行する部分を強く指によって撫でた痕跡を残していると主張している。それ以外に、中央に三葉文を配し左右に2回反転の唐草文を配し、瓦当上縁に面取りがなく顎部後縁は丸みをもって仕上げている瓦についても、古式の瓦として同様の時期に設定した(山崎 2008)。
- (5) 穴田2号窯からは、緑釉が施された軒丸瓦と軒平瓦が出土している。特徴として軒平瓦は平瓦部凹面に布目痕が残されている。共伴する丸瓦はロクロナデによる作り方で内側の模骨をしない特徴を示している。これらは瓦作りではなく、陶器作りと同じ手法で作られたものと思われる。他にも穴田1号窯から出土した鉄釉唐草文の敷瓦などがある。この瓦は瀬戸市定光寺の源敬公(徳川義直)廟焼香殿に葺かれた敷瓦と同じタイプである。年代としては義直が1650年没、焼香殿の完成が1652年とされており、『瀬戸市史陶磁史篇六』にて「穴田窯は寛文以前の時期、すなわち敷瓦焼成後あまり時を経ずして廃絶した」と記載されていることから穴田窯自体も17世紀中頃に廃絶されたものと思われる。
- (6) 光明寺鐘樓門は享保8年(1723)に萱津屋武兵衛の寄付で建立されたと記録されている
- (7) 金子氏は江戸中期以前の瓦の刻印は丸や菱など記号的なものが多く、19世紀以降具体的な地名や職人名を記した刻印が増加する。生産者や作者を一種のブランドとしてアピールするようになっていくと主張した(金子 2018)。
- (8) 名古屋城三の丸遺跡第4次・5次調査でXと分類された瓦は、図3で示した金子氏の分類基準に従うと「大坂式」として分類されるものである。この文様は燻瓦と鉄釉陶器瓦の両方で確認されていることから、これらの瓦は「東海式」の生産地と同じ場所で生産された瓦であると考え

られる。

- (9) 名古屋城三の丸遺跡の調査報告書で重鉍物分析が実施されている例がある。概略を述べると清洲城下町遺跡と岐阜城の資料の鉍物組成傾向が似ているが、名古屋城三の丸遺跡の資料は重鉍物の種類が多くあまり類似性がみられないことが判明した。瓦の生産地についてはいずれの瓦も広域的な意味での濃尾平野とされた(佐藤ほか 1990)。さらに清洲城下町遺跡の瓦には、尾張で生産されたと思われる重鉍物組成を示すものと、西三河で生産されたと思われる重鉍物組成を示すものと、その中間的な重鉍物組成を示すもの、の三種が確認された(鈴木ほか 1997)。

参考文献

- 浅野弘子 2002「名古屋城所蔵の紀年銘瓦について」『名古屋博物館研究紀要 第二十五巻』名古屋博物館
- 市澤泰峰ほか 2010『埋蔵文化財調査報告書 60 白川公園遺跡(第5次)』名古屋市教育委員会
- 伊藤淳史・梶原義実 2007「京都大学本部構内 AU25 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002 年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 伊藤健ほか 2001『尾張徳川家上屋敷Ⅶ』東京都埋蔵文化財センター
- 内野正ほか 1996『尾張徳川家上屋敷Ⅰ』東京都埋蔵文化財センター
- 内野正ほか 1998『尾張徳川家上屋敷Ⅲ』東京都埋蔵文化財センター
- 梅本博志ほか 1990『名古屋城三の丸遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財調査センター
- 岡村弘子 2004「名古屋城下における瓦の生産と供給」『名古屋博物館研究紀要 第二十七巻』名古屋博物館
- 尾野善裕ほか 1995『名古屋城三の丸遺跡第6・7次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
- 梶原義実 2017「第2節 瓦の生産と流通」『愛知県史 資料編 5 鎌倉～江戸 考古 5』愛知県史編さん委員会
- 片桐妃奈子ほか 2021『埋蔵文化財調査報告書 90 古渡城跡(第2次)』名古屋市教育委員会

- 金子健一ほか 1992『名古屋城三の丸遺跡Ⅲ』愛知県埋蔵文化財調査センター
- 金子智ほか 1994『尾張藩麹町邸跡』紀尾井町6-18遺跡調査会
- 金子智ほか 2003『東京駅豊洲北口遺跡』千代田区教育委員会
- 金子智 2018「江戸・東京の瓦にみる幕末・明治一瓦の近代化への流れー」『江戸遺跡研究会第31回大会遺物に見る幕末・近代〔発表要旨〕』
- 川井啓介ほか 1993『名古屋城三の丸遺跡Ⅳ』愛知県埋蔵文化財調査センター
- 木村有作ほか 2019『特別史跡名古屋城跡天守台周辺石垣発掘調査報告書』名古屋市
- 甲崎光彦ほか 1999『尾張徳川家上屋敷Ⅳ』東京都埋蔵文化財センター
- 佐藤公保ほか 1990『名古屋城三の丸遺跡Ⅰ』愛知県埋蔵文化財調査センター
- 佐藤好司ほか 2004『名古屋城中下門跡発掘調査報告書』名古屋市上下水道局水道本部
- 甚目寺町教育委員会 1987『甚目寺跡(南大門南)発掘調査概報』静岡市教育委員会 1999『駿府城跡Ⅰ(遺物編2)』
- 鈴木正貴ほか 1990『清須城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財調査センター
- 鈴木正貴ほか 1997『清須城下町遺跡Ⅶ』愛知県埋蔵文化財調査センター
- 鈴木正貴ほか 2005『名古屋城三の丸遺跡Ⅶ』愛知県埋蔵文化財調査センター
- 竹内宇哲ほか 2000『重要文化財 富部神社本殿修理工事報告書』公益社団法人文化財建造物保存技術協会
- 武部真木ほか 2008『名古屋城三の丸遺跡Ⅷ』愛知県埋蔵文化財調査センター
- 野澤則幸 2000『尾張元興寺第8次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
- 鈴木正貴ほか 2017『犬山城総合調査報告書』犬山市教育委員会
- 高浜市 1976『高浜市誌』高浜市史編さん委員会
- 寺島孝一ほか 2001『図説江戸考古学研究辞典』江戸遺跡研究会
- 並木仁ほか 1997『尾張徳川家上屋敷Ⅱ』東京都埋蔵文化財センター
- 服部哲也ほか 1994a『名古屋城三の丸遺跡第4・5次発掘調査ー遺構編ー』名古屋市教育委員会
- 服部哲也ほか 1994b『名古屋城三の丸遺跡第4・5次発掘調査ー遺物編ー』名古屋市教育委員会
- 平野亜紀ほか 2001『三重県桑名市桑名城下町遺跡発掘調査報告書萱町93地点』桑名市教育委員会
- 平野亜紀ほか 2002『三重県桑名市桑名城下町遺跡発掘調査報告書萱町93(法成寺)地点』桑名市教育委員会
- 藤澤良祐 1988「本業焼の研究(2)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅶ』
- 藤澤良祐 1998「近世上水野村の連房式登窯」『瀬戸市史 陶磁史篇六』瀬戸市
- 藤澤良祐ほか 2007「第2章主要窯跡解説」『愛知県史別編中世・近世瀬戸系窯業2』愛知県史編さん委員会
- 水野裕之ほか 2017『名古屋城三の丸遺跡第12次発掘調査報告書(中央新幹線「名城非常口」地点)』名古屋市教育委員会
- 水本和美ほか 2006「尾張藩邸の屋根瓦」『新宿歴史博物館平成18年度特別展 尾張家への誘い』新宿歴史博物館
- 山崎信二 2008『近世瓦の研究』同成社
- 山崎吉弘 2017「江戸遺跡から出土した搬入瓦について」『幕藩体制下の瓦』埋蔵文化財研究会

《Title》

Chronology of eaves roof tile of early modern period in Owari Province

《Keyword》

Tokai pattern, Eaves roof tile, Nagoyajo sannnomaru remains, Owaridomain's mansion remains in Kojimachi, Owaridomain's mansion remains in Ichigaya, Inuyama castle, Kiyosu castle town remains, Tobe shrine

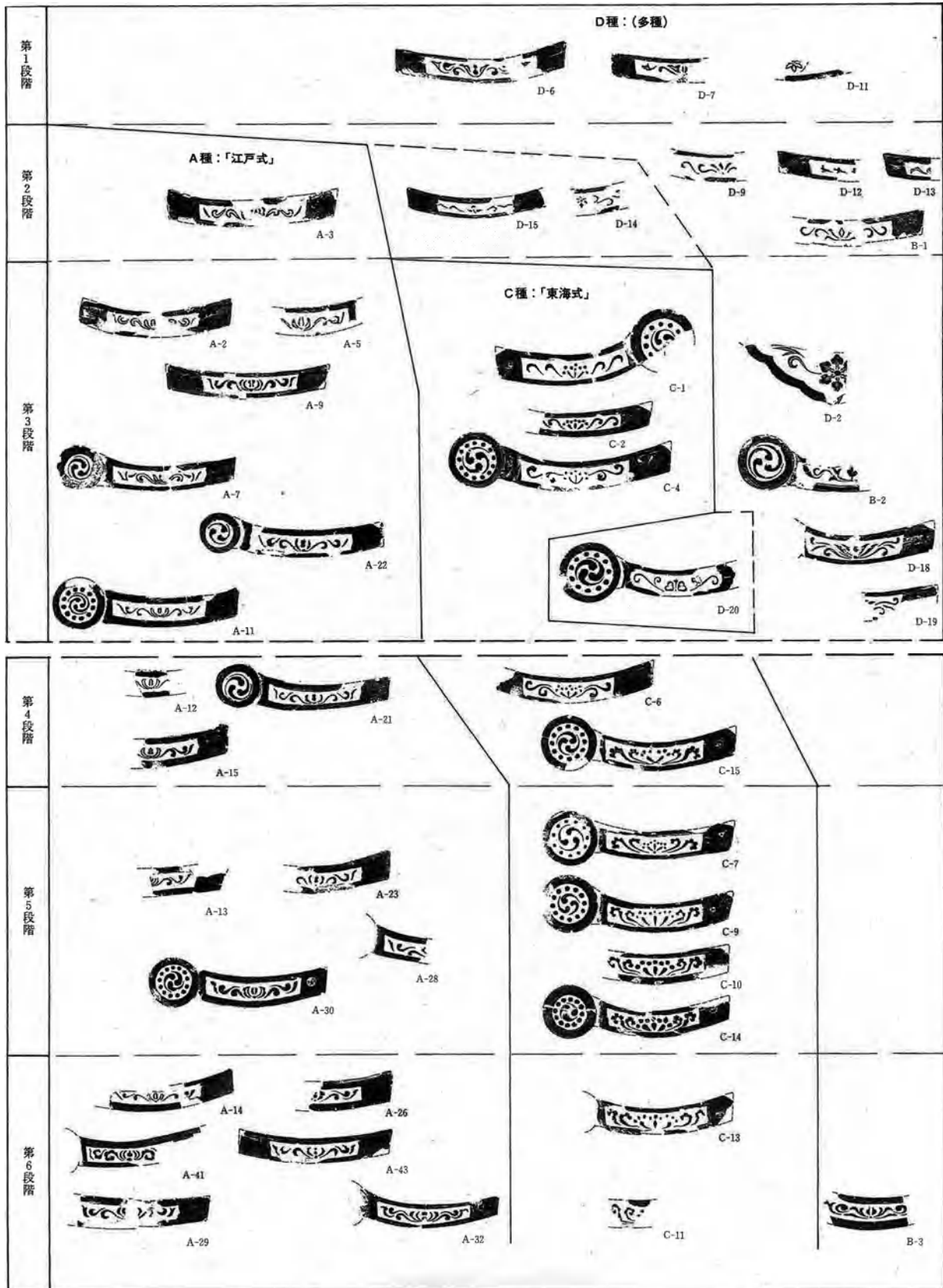


図1 尾張藩麹町跡にて提示された瓦の変遷 縮尺任意 (金子ほか 1994) より引用

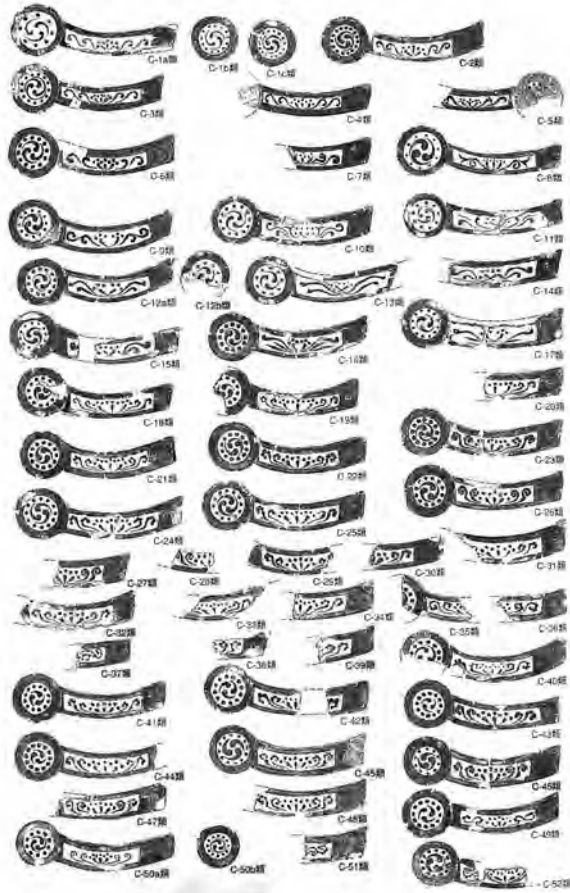


図2 東京駅八重洲北口遺跡における東海式軒平・軒棧瓦の文様 縮尺任意 (金子ほか 2003) より引用・一部改変

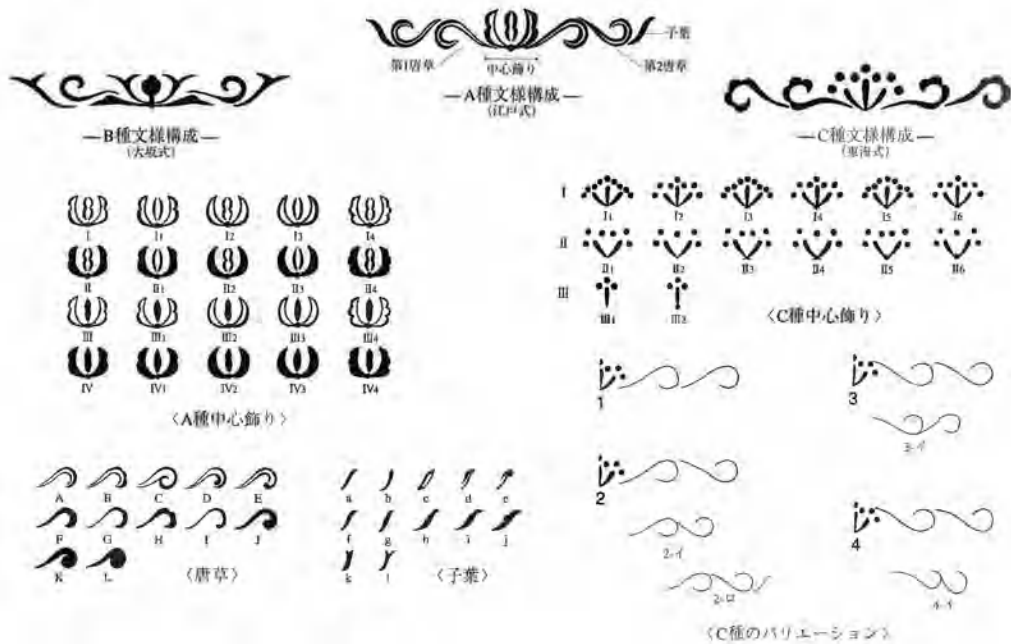


図3 東京駅八重洲北口遺跡で提示された瓦文様分類 (金子ほか 2003) より引用

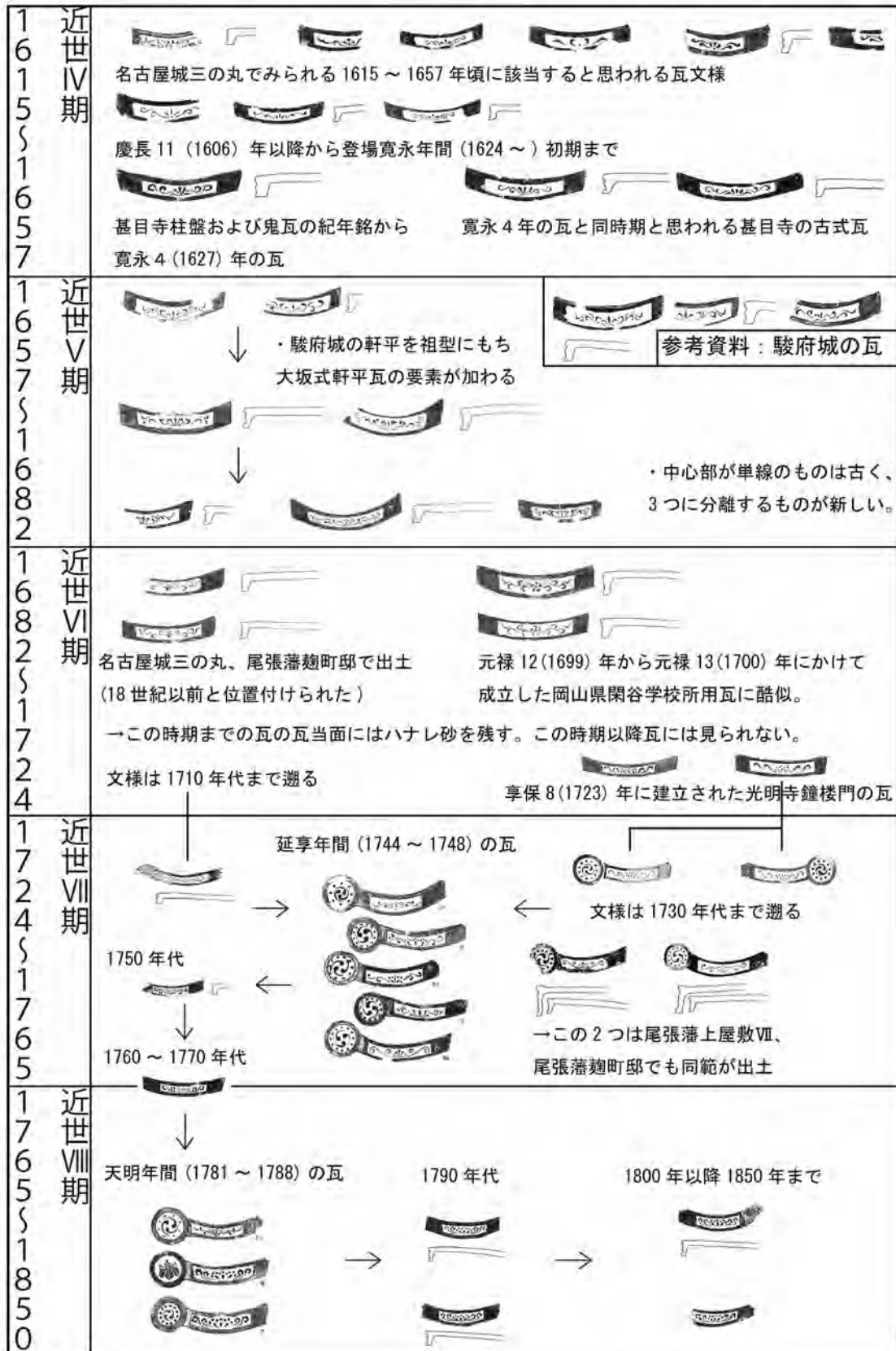


図 4 山崎氏の提示した瓦変遷 (山崎 2008) を基に作成 縮尺は任意



図5 梶原氏が提示した織豊期から近世前半の瓦変遷 縮尺は任意 (梶原 2017) より引用

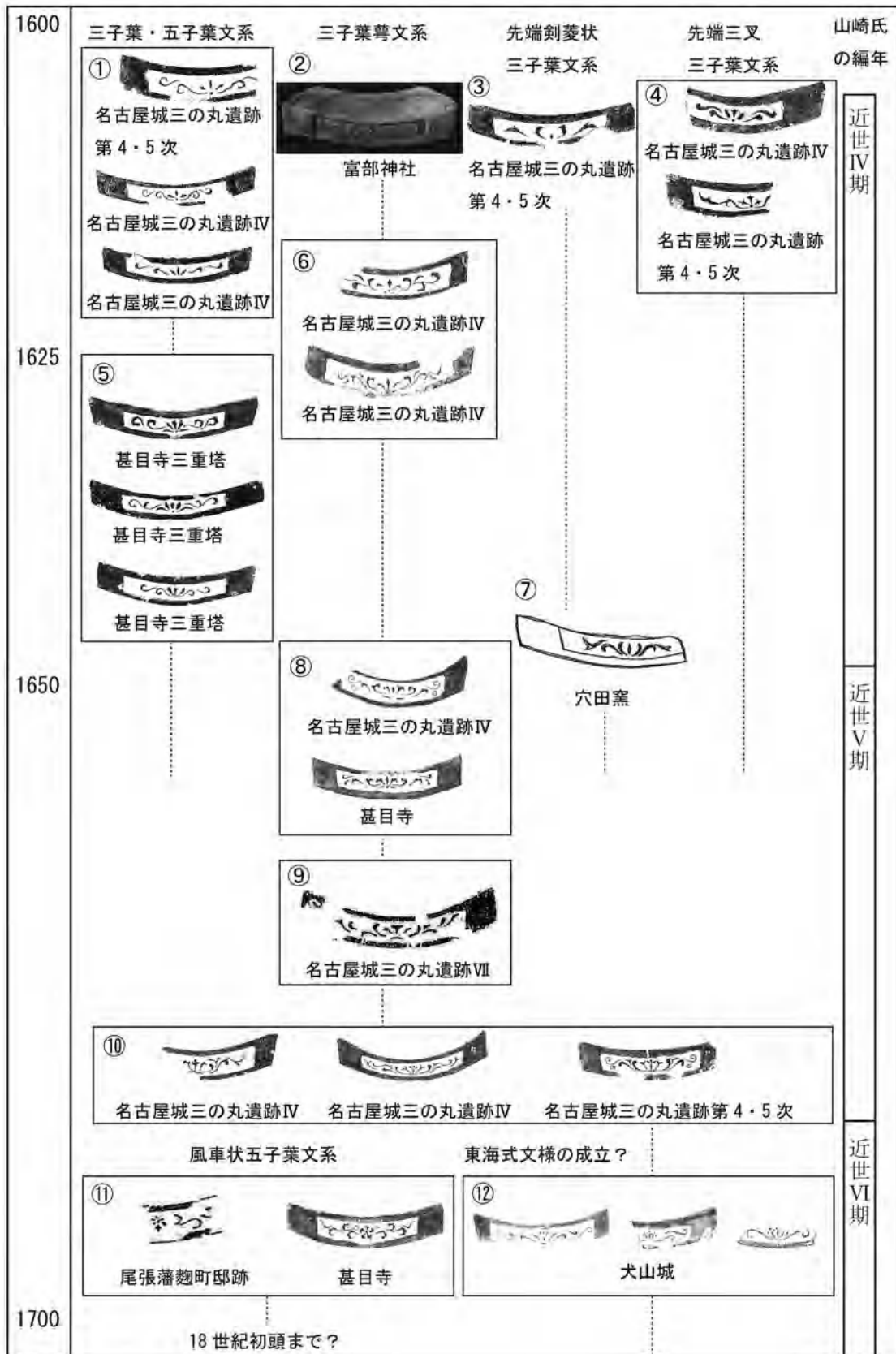


図6 17世紀前半から18世紀までの軒平瓦の文様変遷 縮尺は任意
 (瓦の図版はそれぞれの報告書・参考文献から引用・改変 ②の写真は公益財団法人 文化財建造物保存技術協会提供)

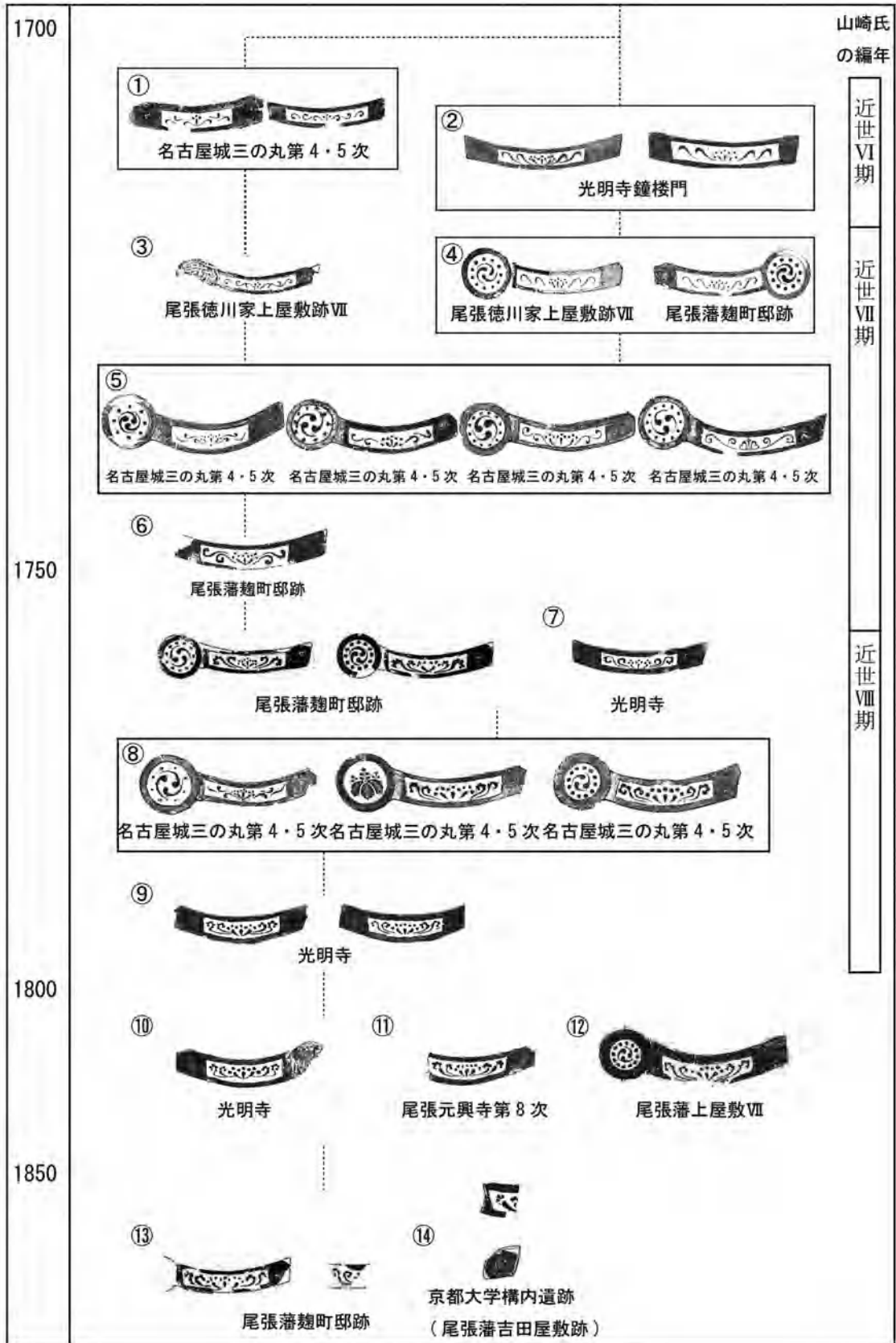


図7 18世紀から19世紀第3四半期までの軒平・軒棧瓦の文様変遷 縮尺は任意
 (瓦の図版はそれぞれの報告書・参考文献から引用・改変)